日文研　深い衝撃を持つ研究所

デヴィッド・ヘバート

三〇年にわたって国際日本文化研究センター（日文研）は世界中の日本研究の分野に深く、また広範囲の衝撃を与えてきた。日本に関心を持つ研究者に重要な資料をふんだんに差し出し、日本の社会文化の遺産を一般に鑑賞させてきた。研究と学会のための私のグローバルな旅のなかで日文研所属の研究者による著作と複数の大陸の書店でしばしば出会ってきた。日文研が直接出版する雑誌『JAPAN REVIEW』やその他の出版物は主要な学術書店で敬意を持って遇され、収集され、新しい知識の普及に役立つユニークで尊敬される場を提供している。私は二〇〇九年の夏、外国人研究員として招かれる大いなる特権を得た。それは日本に興味を持つ他の研究者に喜んで語る非常に意味のある経験だった。いくつかの理由で日文研を偉大な資源だと何度も推薦してきた。⑴所属する研究者が非常に知識が豊富でまた援助を惜しまず、評価と生産力が高いこと、⑵極めて職業性の高い図書館スタッフの有能ぶりと能率のよさ、⑶研究と住居双方にわたって設備が心地よい環境に囲まれていること、⑷京都のあらゆる恩恵に十分に近いうえ、美しい山のそばの自然の中に位置していること。

日文研ですごした時期について多くの心安い思い出を持っている。いろいろな分野の多くの研究者との深い会話。彼らは貴重なアドバイスを与えてくれた。スタッフの配慮の深さは真実驚くべきで心打たれる瞬間を持った。膨大な図書館の資料の合間を探索したり、近くの山々を

歩いている時に思わぬ発見に出会った。中庭の楽しいピクニック（近くの山から現れたイノシシの訪問を受けた）、スタッフとの音楽リサイタルもあったし、コモンルームと中庭から一生に一度の日蝕を見た。日文研と細川周平先生に拙著のなかではっきりと謝辞を述べた。二冊はスプリンガー出版から出版され、一冊は日本における西洋音楽を扱い（『日本の学校における吹奏楽と文化的アイデンティティ』）、もう一冊は近刊のアンソロジーで『日韓社会における翻訳・教育・革新についての国際的視野』と題されている（そこには日文研の郭南燕先生が寄稿している）。将来、日文研に戻ってみたいと心から願っている。そしてこの重要な三〇周年をお祝いしなければならないと思っている。このすばらしい研究所に加わる機会を得たことにとても感謝し、西ノルウェイのフィヨルドから、心よりお祝い申し上げたい。

（西ノルウェイ工科大学教授）

原文：英語

翻訳：細川周平（国際日本文化研究センター教授）